

“ウィックリフ研究に関する二つの復刻版”について

1. Robert Vaughan: The Life and Opinions of John de Wycliffe, D. D., Vol. I & II. 1831, Holdsworth, London, 1973, Rep. AMS. N. Y.
2. B. L. Manning: The People's Faith in the time of Wyclif, Cambridge Univ. Press, 1975, Rep. with Intro., The Harvester Press, Wiltshire.

文化変容と宗教との関係は、その使用する言語が異なる文化圏の接触する場合と、同一言語文化圏の場合とでは、その進展の様相は大いに異なるものである。

筆者はこの数年来毎年一回ネパールを訪問する機会を与えられてヒマラヤ山麓を逍遙する間に、ネパールから日本に至るアジア諸国が、同じ稲作民族でありながらも言語、殊に、文字の形態の比較的類似しているインドとネパールの文化接触という問題について考えさせられた。そして、同じように稲を作り、米飯を主食としている民族ではあっても他の文化を容易に吸収するものもあれば然うでないものもある。こういった観点からキリスト教受容に伴う非キリスト教国の文化変容についての研究調査という問題に着目した書物や論文を見かけることが多くなって来ている。

こうした宗教の受容が人々の思想を変革せしめ、倫理、道徳、生活規範にまで深く大きな影響を及ぼすものであることは、わが国における儒教や仏教の影響が武家社会の忠孝を基本徳目とした生き方を生み出すことになったことは、あの内村鑑三の自叙伝“余は如何にして基督者となりしか”の中でも早くから指摘されて来た処である。

ところが、眼を転じてヨーロッパ社会を眺めるとき、今日の西欧思想なり西欧文化の一大潮流の中で、ヘレニズムとともにヘブライズムとキリスト教とは、いずれも抜く能はざる源流であることは周知の事実である。しかのみならず、最近筆者が関心をそそられていることの一つに聖書の翻訳と文化変容の関

係という問題がある。わが国においても嘗つての文語訳聖書が文学に及ぼした影響少なからざるを思わしめられるのであるが、あの欽定訳英語聖書が、その後の英語、英文学のみならず各方面に大きな影響を及ぼしたことは今更説明するまでもないことであるし、ルター訳の聖書が、常にプロテスタント信徒のみならず、すべてのドイツ人たちにとって民族、国家の自覚を促す一大鉄鎚の役割を果たしてきたこともまた史家の挙って指摘するところである。

このような観点から英語聖書の最初の翻訳者ジョン・ウィックリフの聖書もまた最近になってフットライトを浴びるようになって来ているのである。こういった時期にいみじくもウィックリフ研究に関するすぐれた書物の復刻版が次々と刊行されつつあるのであって、此处に取上げる二冊の書物もまた、すぐれた研究書の復刻版である。

1. “The Life and Opinions of John de Wycliffe はその題の後に illustrated principally from his unpublished Manuscripts ; with a preliminary view of the papal system, and of the state of the protestant doctrine in Europe, to the commencement of the fourteenth century, という長々とした説明が付けられた書物であり、Robert Vaughan によって1831年にロンドンの Holdworth and Ball 書店から出版されたものを、1973年にアメリカのペンシルバニア大学が所蔵していたものからアメリカ AMS 社が復刻して頒布したものである。

本書は前後二巻からなる。

第一巻は、ウィックリフが出現するまでの一般社会の情勢と彼の誕生から始まる生涯の活躍の著作活動について述べられている。すなわち、Preliminary View 3章と Life of Wycliffe 5章が第一巻に収められている。

Preliminary View では、まず第1章において、英国における教皇権が次第に強大なものとなって行く過程を、ドルード教の呪師たちによって指導されていた英国の種族社会にケルト人たちのもち込んで来た政治体制が、アブラハム時代に象徴される神律的な社会として、ユダヤ教の性格を比較して述べ、ユダヤ教を母胎として出現したキリスト教の特質について述べる。このキリスト教においては「教会」という言葉が特別の重要な意味をもつものであり、初代教会が世俗社会に及ぼした影響の大きさを指摘し、313年から325年頃のコンスタ

ンチヌス皇帝によるキリスト教会に対する後援と、王権による後立てが次第に教会の世俗的な墮落頹廃を生ずること、及び教皇庁の権力増大が教会会議と異端追放の過程の中で進められて行くことに言及するのである。

第2章においては、第6世紀頃から起こって来る教会の所有する権力がどのようなものとなりつつあるかということと、14世紀に入ってから間もなく起こって来るプロテスタント的な教理の問題から説き始めて、聖書の忠実な生き方をしようと努力する人々が、反体制的であるという理由のもとに抹殺されようとする教皇庁の態度を指摘する。こうして、14世紀までに現われて来る反教皇庁的な気運をプロテスタント的な教理として捉えて、幾つかの歴史的な事件の中で展開された見解を略述する。宗教改革は16世紀になってから展開されたとする一般的な認識に反して、著者 Vaughan は、14世紀以前から始まったこのような初代教会の影響を受けて展開される聖書中心の運動の傾向に対して、ローマ教皇庁の態度についての批判的な立場から筆を進めて行くのである。

更に第3章では、ウィックリフの時代に至るまでの英国社会において起って来た出来事も社会情勢の中で教会がどのようにして「教会体制」を創り上げて行くのか、またその教会体制とローマ教皇との関係について述べている。殊に単立の王国が覇を競い合っていた時代に存在していた専制的な王権というものは、近代になるとキリスト教の影響によって大いに狭められてしまったのであるが、中世においてはまだまだ強力なものとして存在していた。ところが、近隣の諸国と提携或は離反という政治的な力の移動によってそれぞれの王国の存立が危まれるような時代でもあったので、教会の元首としての教皇の政治的な力が大きな影響力をもつようになった。しかるに英国ではノルマン人の侵入後征服王ウィリアムが王権の拡張を進めて教皇庁との関係においてもアングリカン教会との関係においても、王の優位を打ち出したし、教皇ヒルデブランドによる叙任権問題の提記もあったが、英国ではヘンリー2世とトーマス・ベケットの如く、徹底して、王の意志による拔擢、叙任がなされる時代を経て、アーチbishop さえもマグナ・カルタの適用を受ける基本的な機関とさえ考えられる時のあったこと等について述べている。

このように、第1巻では、226頁にわたって “On the Rise and Character of the Papal Power”, “On the State of the protestant Doctrine in Europe,

to the Commencement of the Fourteenth Century” および “On the Establishment, and the State of Society in England, Previous to the Age of Wycliffe” の3章に分けて Vaghan の展開する Preliminary View は、一部の大陸の問題をも絡ませた英国教会史のダイジェスト版の趣きさえも思わしめる。しかしながら、筆者は、茲に著者 Vaghan が1巻の残り第2巻全巻に亘り詳述するウィックリフの生涯についての記事を特長づけるための布石と見るのである。

さて、第1巻後半と第2巻を通じて展開されるウィックリフの伝記は、いわゆる年代記的な記述とは全く異なる形で筆を進めている。即ち、出生から大学卒業までの経歴については通常の伝記と余り変わりはないのであるが、それ以後はその時その時にウィックリフが書き著わした小冊子や論文などの、いまだ活字として公刊されていなかったものを多量に取扱って、それぞれの年代におけるウィックリフの見解について述べて行くのである。

したがって、ウィックリフ研究の上においては、公刊されることのなかったトラクトやパンフレットなどについても読者の目の前に提示しつつ、ウィックリフ自身から読者が語りかけを受けるかのように思われる。1831年に出版されたものであるから、この度の復刻版が出されるまでの間には、この時未公刊であった草稿のうちのどれだけのものが出版されて来たかについては筆者の知り得ないところであるが、それでも、ウィックリフについての研究を進めようとする場合には座右において参考にするべき書物と考える。

2. Bernard Lord Manning : The People's Faith in the Time of Wyclif, Cambridge University Press, 1917, Reprinted with Introduction 1975, the Harvester Press, Wiltshire.

この本は、もともと1917年の Thirlwall Essay をケンブリッジ大学出版が印刷刊行したものである。そして、同じ年、同じ出版社から第2版が出され、約半世紀を経て1975年に同じ出版社から第3版が刊行された。更に、今回、ロンドン政経大学で経済史の講義を担当している DR. A. R. Bridbry による評価的な序論を付してウィルトシャーのハーベスター出版社から刊行されたものである。

著者マニングは僅か200頁にもみたぬ本書の中で、宗教改革前夜ともいうべ

き、14世紀の社会、人々の生活をわれわれ読者の眼前に彷彿たらしめる。

この本は、以下12章からなる。 I THE MASS, II THE SERMON, III THE CONFESSIONAL, IV THE RUDIMENTS OF THE FAITH, V BAPTISM AND CONFIRMATION, VI COMMUNION AND EXTREME UNCTION, VII ERRONEOUS AND STRANGE DOCTRINES, VIII GOOD WORKS, IX HOLY DAYS AND HOLY PLACES, X THE PROBLEM OF POVERTY, XI THE PROBLEM OF FREE WILL, XII THE PROBLEM OF RAYER

さて、これらの中で、I・II・IIIは直接礼拝に関するものである。著者マニングは、「普通の信徒たちはいったいどれぐらいしばしば礼拝に出席していたらだろうか？ また、その礼拝はどんなものであったらだろうか？」という質問から始める。この問の答として彼は続けている。「特別の理由がない限り信徒は毎日教会の礼拝には参加しなければならなかった。というのも、人々のあらゆる日常生活のこまごましたことが、すべて呪いやたたり結びつけられて考えられていたため、もし礼拝を休むようなことでもあればその結果は明らかだと考えられていた。」とはいうものの当時の大多数の人々は農業に従事していたのであるから、必ずしも出席し易いものではなかったし、有閑階級の人々にとっては夕食と同じように、毎日毎日のきまりきった行事の一つとして礼拝出席が行われていた。また、富貴の人々は、邸内に礼拝堂を建て、私設チャプレンによる毎日の礼拝に出席するという人々もあった。

しかし、それでも、一般の人々も礼拝には朝の祈りだけでも出席するなり、早禱を捧げあって「礼拝が眼に見える会衆のためのみのものと見るのは一面的である。すなわち霊的なものもまた含まれている。礼拝は生きている人々の信仰を固めるだけではなくて、死んだ人々の霊にも慰めを与えるものである。」というように著者は述べている。

いづれにしても、この本の最初の3章は礼拝に関するものとして、それぞれ、人々の礼拝に出席する態度や、その人々を取巻いている迷信的なものとの関係を述べている。

次に、IVからIXまでの章では、それぞれのタイトルのもとに当時の一般的な宗教の具体的なことがらについて、理論と実際の面から展開し、普通の人たち

はキリスト教について何をどれ程知っていたのだろうか、また、彼が聞き知っている聖書の話についてどれ位うまく人に話して聞かすことができるのか、というさまざまな具体的な問題について、当時の人々をして語らしめるのである。

また、更に、X・XI・XII については、一般の人々に働きかける三つの問題、即ち、貧困に関する社会問題、および祈禱に関する宗教的な問題をかかげて、ウィックリフの祈りについての意見が正統的な教父達の教えた処からかけ離れたものとならないように影響を与えたと述べている。

全体を通読するとき、14世紀頃のイギリスの普通一般の人たちがどんな宗教生活を営んでおったのだろうか、ということをつよく浮彫りにしようとする著者マニングの意図は十分に達成されている。この本の特長は、先に記した12の章が、それぞれ手短かに当時の状況をあたかも当時の人々がわれわれ読者に話しかけてでもいるかのように思わしめる書き方にある。そのような問題のとり上げ方と筆の進め方がわれわれを魅了して、「礼拝」「説教」「告解」……というような一見堅苦しい題の各章を一気に読み進ましめるのである。

読み終わった後に改めて頁をくって見ると、僅か200頁にも足らないこの本が提供してくれたものが、優に4倍も5倍もの量であることを思わしめられる。ウィックリフのみならず、宗教改革時代に関心を抱く学徒なら誰しも興味につられて読みきり、その益するところ多きに感激せしめられる書物の一つということが出来るのであろう。「宗教改革直前のイギリスの宗教事情についてこれだけ鮮明な絵を提供してくれるものは他にない」という新版紹介者 A. R. Bridbury の言葉をまつまでもなく、1917年出版されたこの本が、1975年に2度も改訂版を出版せしめた読者たちの関心が、とりも直さずこの本に対する評価であるということも出来るだろう。（藤間繁義記）